

# 第64回日本公衆衛生学会総会

結核研究所対策支援部長

小林 典子

平成17年9月14・15・16日の3日間、第64回公衆衛生学会総会が「環境と人権がつくる人々の健康と安全」をテーマに、“北の大地”北海道で開催された。初日はあいにくの小雨模様であったが、翌日からは爽やかな秋空が広がった。「人と人が響きあう」をコンセプトに建てられた札幌コンベンションセンターは初秋の陽光にあふれ、今学会のテーマにふさわしい会場であった。

## ◎ 一般演題（結核）

結核に関する一般演題は口演4題、示説29題で例年とほぼ同数の33題であった。口演ではQuantiferon検査に関する演題に質問が多く寄せられ、関心の高さが伺われた。示説では、住所不定者の結核対策に関するNPO団体の発表が目をつけた。健診を実施する際、NPO、健診機関、生活保護行政、医療機関が連携体制を整備し、受診者の事情に配慮した事後対応を行うことによって全員を治療につなげたとの発表は、今後大都市の住所不定者の結核対策に大きな示唆を与えるものと思われる。その他、DOTSカンファレンスやコホート検討会等医療機関との連携を通して、地域DOTS事業を展開・強化している報告が注目された。

## ◎ 自由集会

学会初日の17時30分から2時間、「結核集団発生の対策に関する自由集会」を開催した。今回は同じ時間帯に公式イベントが開催されたが、例年と変わらず106人の参加を得ることができた。自由集会だけに駆けつけてくださる方もいて、10年間継続している賜物と主催者として嬉しく思った。

今年度は新しい制度下での接触者健診のあり方と共に、新しい技術の応用として、結核分子疫学（結核菌遺伝子タイピング）と結核感染診断の新技术（全血インターフェロン 定量）を用いた事例の検討を行った。「QFT-2Gの課題と可能性」と題した結核研究所長（森亨先生）の講演では、接触者健診時 医療従事者の健康診断時、臨床における診断補助時におけるQuantiferon<sup>®</sup> TB第二世代（QFT-2G）の使用方法が示された。今後の課題としては、感染からQFT-2G陽性になるまでの時間について観察を積み重ねること、ツベルクリン反応検査のQFT-2Gの成績に対する影響について、

9月14日～16日 / 札幌コンベンションセンター

その有無・程度・持続期間等を慎重に検討することが述べられた。また、採血から抗原刺激までの時間（12時間以内）の短縮が期待される第三世代についての紹介もあり、参加者の期待が膨らんだ。

事例報告では、中野区保健所深澤啓治先生、京都府丹後保健所中村清康先生、名古屋市健康福祉局健康部氏平高敏先生からQFT-2Gおよび結核菌遺伝子タイピングを用いた事例が紹介された。

## ◎ 結核研究所ブース

研究機関・大学等の研究・事業等の紹介を目的とする一般ブースにおいて、例年、結核研究所各部署の業務紹介を行ってきたが、今回はDOTSに焦点を絞った展示を試みた。各国の取り組みとDOTSの成果、日本版DOTSの概要についてのパネルと共に、自治体が作成した服薬手帳を展示した。展示を通して、DOTS事業に取り組んでいる保健所職員と具体的な事業の展開について意見を交換することができた。また、保健師学生に服薬支援の重要性、保健所の役割を伝えることができたことは収穫であった。

## ◎ おわりに

今回はシンポジウム9題、教育講演6題、特別講演3題の他、道民公開講座、フォーラム、教育ワークショップ、ランチョンセミナーと公式行事が満載の活気あふれる学会であった。賑やかな会場において、公衆衛生の原点としての結核対策の行方を真摯に見つめる仲間と出会えたことは大きな喜びであった。

自由集会の様子

